学校だより　第5号

加曽利中

千葉市立加曽利中学校
令和　元年７月１２日

「思いのリレー」に加わろう

生徒指導主事

最近「植松　勉さん」という方の本を読みました。この方は、株式会社植松電機の代表取締をされています。従業員が２０名足らずのという小さな町工場でありながらロケット事業に取り組んでおり、池井戸潤著「下町ロケット」のモデルにもなっています。その著書（ちょしょ）の中で、感銘（かんめい）を受けた部分を紹介します。

「僕たちは昔、海で生まれました。そこで、大いに繁栄します。しかし、競争が激しくなります。だから、水辺に逃げていきます。なぜなら、水辺は海よりもつらい環境だから、競争相手が少ないからです。

そもそも淡水だったりします。塩分を体に閉じ込める仕組みが必要になります。水がなくなることもあります。えらが使えないから、肺呼吸が必要になります。泥の中でも移動しないといけません。足も必要になります。吸い込むことでの捕食ができないから、口や歯も発達します。そうやって、両生類になりました。そこで、大いに繁栄します。しかし、競争が激しくなりました。だから、陸地に逃げていきます。なぜなら、陸地は水辺よりもつらい環境だから、競争相手が少ないからです。

陸地では、体が乾いてしょうがないです。だから鱗（うろこ）が必要になりました。卵も、殻をつけて産むようになりました。そうしてハ虫類になりました。そこで大いに繁栄します。しかし、競争が激しくなりました。だから、より内陸の寒い所に逃げていきます。なぜなら、寒い所は、陸地よりもつらい環境だから、競争相手が少ないからです。

体温を保つために、毛が必要になりました。赤ちゃんも体内で育てるようになりました。そうして、ほ乳類になりました。そのまっすぐ先に、僕ら人類がいます。

生物は、争いを避けて、よりつらい方向に逃げたのだと思います。だから進化できたのだと思います。もちろん、現在も、ハ虫類も両生類も魚もいます。それはそれで、成り立つからです。その存在は、間違いとは言えません。この進化には、もう一つ、ある現象があります、それは、子どもを産む数が、どんどん減っているということです。魚の卵の数から見たら、ほ乳類の出産数は、ものすごく少ないです。でも、少ないからこそ、大切に育てるようになったと思います。その過程で、愛情が生まれたんじゃないかな、と僕は思っています。だから僕は、いまの「人」としての人生が、けっこう気に入っています。」

私たちは、約７００万年もの月日をかけ、進化しながらこの世に生を受けました。そこには、次の世代が残るための叡智（えいち）が集結しています。そして、親から子へと「命のバトン」が受け継がれるとき、そこには何ものにも代えがたい愛情が注ぎ込まれているのです。私たちはこの「命のバトン」を次に引き継ぐ使命があります。この夏は「自分とは何か？」を見つめ直す、そんなきっかけにしてみてください。

「自分の凡事徹底を見つけよう」

＊凡事徹底とは……「何でもないような当たり前のことを徹底的に行うこと。または当たり前のことを他人の追随（ついずい）を許さないほど極めること」という意味です。

① 自分からあいさつをしよう

② 脱いだはき物はきちんと並べよう（できてないものを見つけたら直そう）

③ 何かをしてもらったら、きちんと「ありがとう」を言おう、伝えよう

※最近、「ありがとう」がきちんと言えない、伝えられない人が増えているように感じます。「してもらう」ことは当たり前ではありません。時には恥ずかしく感じることもあるかもしれませんが、きちんと伝えることが大切です。「ありがとう」を言う、してもらったことと同じようなことをしてあげる、別の形で何かを手伝う……人によって伝え方は違うと思いますが、まずはきちんと行動してみましょう。